

幼がたり

## 流れと雑魚

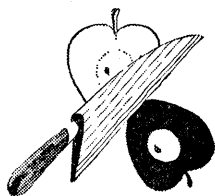
### 幼い日々の家庭環境

既載の方々の生来の素質の良さに加えてすぐれた環境で幼児期を過ぎたのに対し、魯鈍に生まれ雑駁な育ち方をした私の幼児期を記すことは逡巡されましたが、日露戦争の戦勝国として漸く世界の一等国に進出し、男子は立身出世することを本懐とし、驕慢の風潮が流れはじめた明治末期から、やがて大正デモクラシーが台頭しかけた時代に、庶民の子として多かれ少なかれ時代の影

### 川崎 千束

響もうけて育った幼児期を記すのもあながち無駄のみでもないと思われ、恥知らずのペンを執った次第です。

三重県庁の所在地であり旧くは藤堂三五万石の城下町でもあった津市の丸の内本町に生まれ、父は私の出生時は、県会議員・新聞社社長・商工会会長・蘭問屋主人と多様な肩書を持っており、職業柄使用人は多く出入りの人人も賑やかで常時ゴタゴタしている上に、七人兄弟の大家内でした。食事時は、最初子ども達、次は店の使用人、最後が台所の人達と三段階に分れていました。母は





▲晩年の父

父の不在の時は子どもと共に食卓を囲みましたが、多くは父の給仕をしながら腰高の膳で父と共に食事をしていて、私達子どもは父と食事を共にするのは正月や祭礼以外にはなかったようです。以上の環境だけでも野育ちになり勝ちなのに、独りの姉は私の四歳頃に嫁ぎましたから男兄弟の中で三輪車竹馬風上げの助手として屋根登りなど得意になり、屋根に登り損じて接骨院通いもしました。姉は母に似て容姿端正でしとやかで女学校の絵葉書になった程でしたが、私は父親似の不器量で外見は似も

つかぬ姉妹でした。

ある時父に連れられて県の華やいだ会に出席した場で「こちらの嬢ちゃんはお父様似ですな」と言われ、ものかなしくなつて袴の紐を噛んでいたのでしょう。会から帰るなり父は母に向つて「袴の紐ばかり噛んでいてみつともなかった」と告げましたが、その素因が父にあったとは知るよしもなかったでしょう。

父は肩書の多さが示すように野望家であり派手好きでもあったようで、毎年年の瀬になるとどの家よりも大きい門松が立てられ、相撲巡業が津市で催されると太刀山という横綱が挨拶にきました。祭の日には店の連子を取払い金屏風の前に座つて踊り屋台を見物し、屋台衆も家の前で一段と鼓や撥の音を冴えさせて山車を曳いて行きました。又ある日は岩田川に納涼船を浮かべジンタのような音楽を流して新聞の読者を招待したりして私たち兄妹はその船上ではしゃぎまわりました。

私が運動やさんと呼んだ人達が七八人居て父が衆議院選挙に出馬するのを応援する人達でした。父は落選しま

した。その因は複雑でしょうが、母は築港問題を四日市市を推す人と争ったからだと後になって話してくれましたが、四日市市は名古屋市に近く港を築くの適地であると誰しも考えるのに、勝目のない政策を何故父が主張したのかと、そんな父の血が私にも流れているようで反省する時があります。父の落選のおかげで津市は現在も三重県下の文教の都として脈打っています。

父の悪口を使用人の口から耳にすることはあっても母のことは口を揃えてその徳を褒め祖母へ尽した孝養は語り草になっています。私の幼い頃祖母は臥床ながらまだ生きていて、二階の奥座敷に朝の挨拶に向うのが日課になっていました。私は祖母の寝姿が気味悪く、たいていは襖の外から声をかけるようにしていましたが、時たま呼びとめられるとせん方なく室に入り「お早ようございます」と両手をついて挨拶しました。すると瘦せた手をさしのべて「おたからじゃのう」と頭を撫でてくれました。そんな日は大役を果たしたように階段をかけ降りたものですが、今の私と同じ位の年齢であつたらうに申し訳

ない事をしたと悔まれます。

母が誰よりも心を痛めたのは幼い日の私の言動でした。「お前は強情で不可ない。その強情さを矯さない限り、生涯の不仕合せになる」と言い言いました。私は強情の真の意味が理解できず、小学生になってから辞書で調べてなるほどと合点しました。一度繭の乾燥室に入れられたことがあります。乾燥室というのは繭の中の蛹が蛾にならぬように乾燥してしまふ室であつて、繭の最盛期には信州あたりから客達が泊りこみで買付けに来て買った繭を乾燥して持ち帰るのでした。

乾燥室内は熱くて暗くて繭の臭味がたまらなく泣き声も立てられぬ程でした。おそらく三分とは経っていなかったでしょう。母は無言で戸を開けてくれ私も亦無言で出て来ました。「男の子たちをこんな乾燥室へ入れたことはないのに、女の子のお前を入れるとは」と嘆いた母の言葉は今も耳朶にあるのに、何故乾燥室入りになったのかはすっかり忘れてしまいました。思い当るのは、当時広い店には電燈ばかりでなく瓦斯燈もいくつかついて

いました。その光を出すホヤを指で触ると脆く崩れるのが面白く、椅子に乗ってまでも禁を破って崩してまわり快哉としたのがみつかつたのかも知れません。

強情々々と言われても、私なりの理由がありそれを表現できない心奥のモヤモヤが方向違いに爆発し、泣き止まなかつたりすると、疝の虫が起きたと奇應丸などを飲まされたものでした。父は職業柄しばしば上京し、その都度土産を買って来てくれましたが、私が案外喜ばないのを、張合いのない子、妙なところがあると評しました。が、当時流行のカチューシャのリボンや幼い目にも高価に映るアストラカンのマントや爪皮のついた草履など、普通と異うものを身につけるのが気恥しく、母はこの見目麗しくない娘をせめて人並にと思うのと、父の私への暖い気持を素直に受入れさせてそれらの物を身につけさせようとするのですが、その父母の情がわかりながら私は強く拒みました。それでいて琴の会などに出演する時などは同じ年齢の子の服装を素早く見て取って、自分の衣裳の柄の良さを誇らしく感じました。この複雑摩訶な

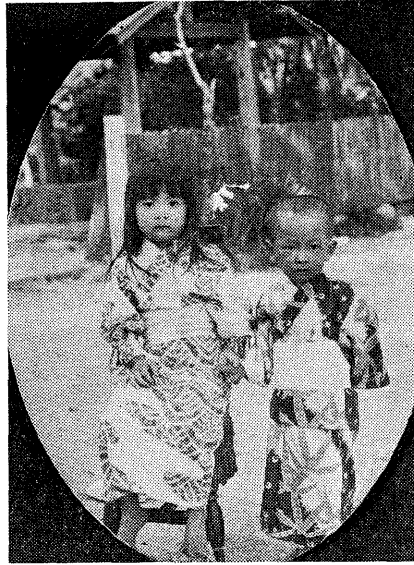
心理を我ながら解しかねます。

母は多忙な上に家が広かつた為、起床から寢に就くまで出会わない日もありましたが、ひねくれ娘の心を少しでも柔げたいと願つたのでしょう多忙の中で羽子板の押し絵や、海老や鯉を縮緬の布で本物そっくりに作つてくれたりしました。夜は必ず私と弟との為に添寝しながらイソップのような話やいろいろなお伽噺をきかせてくれましたが、私は浦島太郎的なものより北伊勢に伝わる柳田国男の遠野物語のような怖い話が好きで繰返しせがんだものでした。怖い話が好きとは反対にいろは歌<sup>歌留多</sup>は好きでなく、何故亭主は赤烏帽子が好きなのか、かつたいは何を恨んでいるのやら、さっぱり判らず、それより姉や兄の友達が大量集つて賑やかな百人一首の方が雰囲気的にも好ましく、次の三首は膝の下に敷くような卑怯なことをしなくても必ず取ることができて、姉と組んでミソッカスの一役を果すことができました。

。紀友則 ひさかたの光のどけき春の日に……………

。藤原実方 かくとだにえやはいぶぎのさしも草……………

。藤原定家　こぬ人をまつ帆の浦の夕なぎに……  
これらの恋歌の意味が判らう筈もないながら語呂の良  
さにひかれたのでしよう。



▲藤堂高虎を祀った高山神社の  
境内で、弟と。

弟には乳母が付いていて晴れた日には私も連れて観音  
様へよく遊びに出かけ、境内の小さい池で亀たちが甲羅  
を干しているのを興深く眺めました。観音堂の中に「お  
びんづる」という座像の仏様が色褪せたよだれかけなど  
してまつられていて、弟が風邪っ気の時乳母が、おびん  
づるを撫でまわした手で弟の身体中を撫でさするのが汚

らしくて我慢ならず、「止めて！」と強引に止めさせま  
した。爾来(じこ)乳母も私を強情とし、弟は素直と弟ばかりを  
褒めるようになりました。そんな乳母にオメオメと付い  
て観音様行を続けたのは境内で売っているみたらし団子  
の味の魅力からでした。

然し家の前に煙管掃除のラオ屋の小父さんの来る日  
は、掃除の手順を見るのが面白く、乳母に付いて行かず  
小父さんを待ち仲よしになって煙管に湯気をあてるのを  
手伝わせてもらったりしました。観音様の年に一度のお  
会式は盛大で、現在の夜店の集大成のようなもので、数  
多くの見せものが出て、のぞきからくりの不如帰の口上  
などを真似てみたり一度猿芝居も見ました。

出しものは阿波の鳴戸でしたが、お弓とおつるの悲し  
みの場面も猿が演じると面白さに変わりました。観音境内  
に近く一流の芝居小屋があり、松旭斎天勝の一行が奇術  
を交えて、七匹の小山羊を演じたのを観た時、世にこん  
なに楽しく美しいものがあるかとすっかり魅せられ天  
勝にあこがれました。

姉の嫁入りの行列を狐の嫁入りの絵のようだと思送り、その行列が視野から遠のいたとき身辺から華ぐものがうたかたのように消去っていくのを四歳の私は感じました。

その直後、幼稚園生活が始まりました。

### 幼稚園の落ちこぼれ

当時、津市には二つの幼稚園があり、一つはキリスト



▲姉



▲姉の嫁入り道具の行列。先頭は一番々頭。青竹の杖は嫁家についたら折って帰る。

教主義で創立され、私はもう一つの丸の内幼稚園に入園しました。兄達二人もこの園の卒業生ですから、多分日露の戦争に戦勝した頃設立されたのでしょう。(現在は廃園)

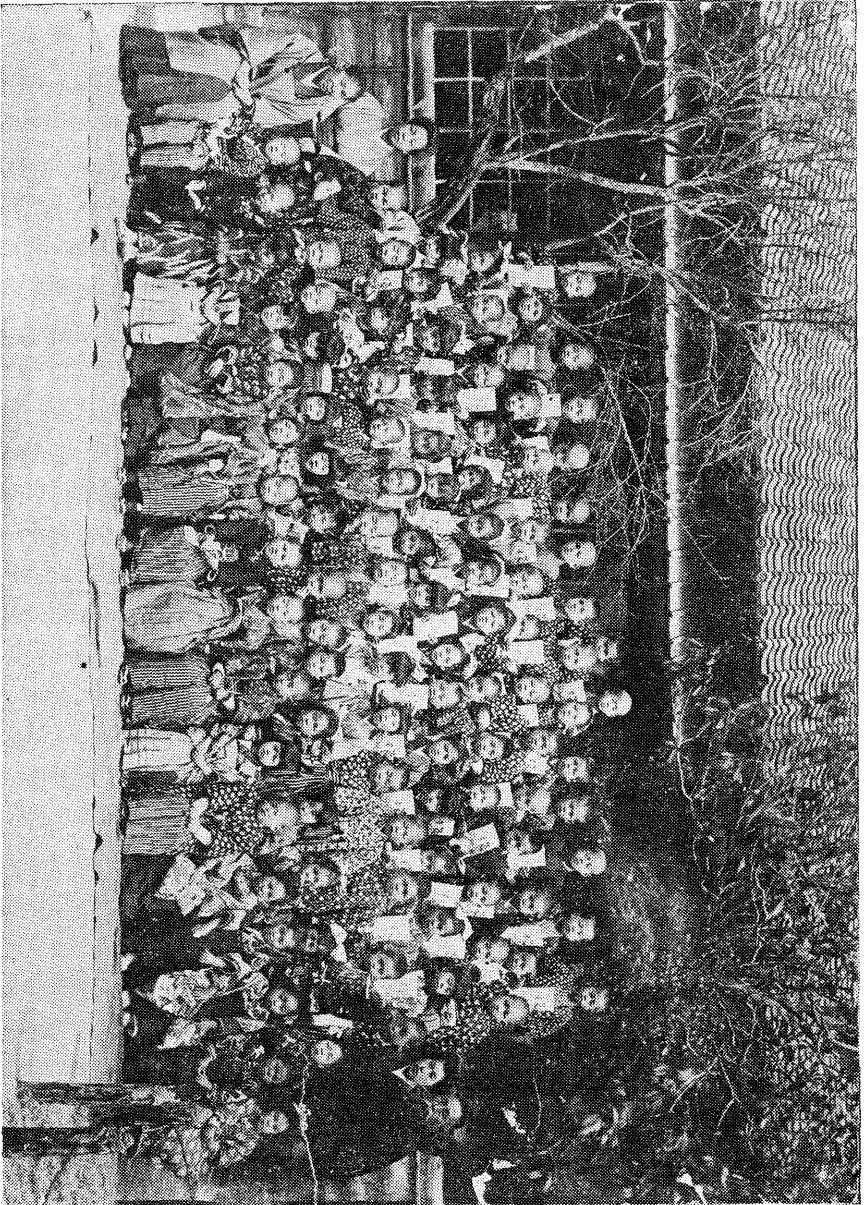
黒い冠木門を入ると大きな築山があり、築山の周囲が通園路で、保育室は二つ、ホールが一室で、私の生家の四分の一ほどの建坪だったと記憶に残っているので、普通の邸宅を幼稚園に改築されたのではないかと想像されます。卒業写真に依って数えたら百廿名ほどの園児数ですから、規模の小さい園だったのでしょう。常勤の先生が二人。他に切り下げ髪のお婆さん先生が時々顔を見せられ、もう一人、入卒の式には男の先生が出席されました。

家政大幼のお母さん達から「他の幼稚園に行っていたら落ちこぼれになるところでした」と、感謝めく言を耳にしますが、私自身幼稚園の落ちこぼれでしたから、幼い人たちの心に傷は残したくないと配慮したままでした。

私の幼稚園生活は、アルミニュームの円筒のお弁当入

れの蓋に先生が注いでくださる生温いお湯のように味気ないものでした。男兄弟の中で気ままに遊んでいた野性の子が、幼稚園という特種な枠の中で順応していくのは辛抱そのものでした。朝の会集に始まり登園から降園まで自由に遊べる時間はなく、次から次への仕事は今にして思えば、フレールルの恩物を消化するのみのカリキュラムであったようです。恩物の第三四五六は積木で、主として年嵩のU先生が担任され、この先生のキリリとしまった様子には親しみ難く「積木を出す時は箱を逆さにして音をさせないようにして蓋を静にとるよう」と言われると緊張してカタリツと音を立ててしまうのでした。積み上げる形も定っていて私にとっては恩物というより愚物的なものでした。又金属の細い棒と環を並べて、「月に叢雲」と教えられてもびったりせず窓外の雀の動きを見たりしていました。

私を尤も悩ませたのは織紙オリシと縫いとりでした。織紙は竹べらに細い色紙を挟んでそれを台紙に通して幾何的な模様を織っていくのですが最後の一本は通し難く、紙は



▲幼稚園の卒業写真 (筆者は上から四段目の左端)



伊予証が使われ伊予証は上手に仕上げると落着いた光沢があり出来栄えするのですが、現在の色紙に比べると弾力が少く、私がやっと最後の一本を通し終えても紙はしんなり萎えてしまつて情ない仕上りです。縫いとりは画用紙に下絵が描いてあり絵の線に穴があけてあつて木綿糸でアウトラインステッチのように縫つていくのです。

私が幼稚園に居残りをさせられたのは波に千鳥の絵の縫い通りの時でした。千鳥も青海波も曲線で描かれているのに糸を強く引っぱつたら穴と穴が共通して直線になつてしまい無惨なものとなりました。こぼれそうな涙を押えてとにかく再仕上げして許され、帰宅して母の膝に泣き伏しました。

それでも登園拒否もせず、翌朝登園して玄関で上草履と履きかえている時、二人の先生の会話が耳に入り私の事だと直感しました。

U先生「あの子の兄さん方はよく出来て素直な良い子でしたがねえ」

若いM先生「あの子もお行儀はよろしいですね」

私の心はU先生からますます遠のいていきました。私は三月生れで最年少であつたのに歴年齢は少しも考慮されていませんでした。

朝の会集の後で時々輪になつてまわり、

へ中の中のお子さんよ、あなたはどなたがお好きです。

お好きな方と代りましょう。さあさあこちらでさあこちら。

とうたつて、かごめかごめと同じ型の遊びをするのですが、かごめの歌詞はどこやらドラマチックで曲にも明るさがあるに引換え、二音程の単調な曲でした。運悪く円陣の中に入れられ「お好きな方と代りましょう」と言われても、好きな人がなく（二三人はいても既に円陣の中へ入り済み）うろたえるばかり。

さあさあとせかせせられてもますますもじもじするばかりでした。後年保育者になつて、かごめをする時、園生活に馴れない時期には名指しせず、うしろの正面だあれで交替するようにしました。これは落ちこぼれ体験者の配慮でしょう。

私の覚えたお正月のうたは、

へことしもいつしか年の暮、お正月には床飾り 滝廉太郎作曲のへもういくつ寝るとお正月…… の心弾むお正月のうたとは何と大違いな歌でしょう。このように子どもの心不在の歌ばかりでしたが一つだけ心に叶ったうたがありました。へべすべす立て立てお着やるぞ。お着やるから三べん廻れあれあれべすが廻るよ廻る面白いな可笑しいなへ

忘れられない出来事は、おさげ止めをSという子に二度も持ち去られたことです。Sという女兒が私を選んだのは、多分居残りさせられた愚鈍な組し易い子と思ったからでしょう。毎朝母が髪を結っていてくれました。Sが私の髪からおさげ止めを外して持ち去ろうとした時、「返して！」と呼びましたがニタリッと笑って返してくれず、翌朝母に見咎められ、「落した」と咄嗟に嘘を言いました。二度目の時は落したとは言えず持ち去られたことを白状しました。「何故返してと言えなかったのか」「嘘つきは悪い子」と大変叱られました。Sの名を告げ

た時、母はぶつり黙ってしまい、私の髪形をおかっぱにしました。Sは母の和裁の先生の孫だったとのことを後で知りました。幼稚園生活で受けたコンプレックスは私の心の中に長く尾を引きました。

私達兄弟は父と食事を共にすることは殆ど無かったと記しましたが、私は麻疹の後ジフテリアに罹りその後、時期が藪の出盛りで家中が埃っぽくなるからとの理由で、父と二人だけで阿漕ヶ浦の貸別荘で一ヶ月余を暮しました。食事は家からと近くの料理屋から運ばれました。父は落選の後で心身ともに疲労していたのでしょう。椅子に凭れて瞑目している時が多く、それでも私が磯遊びに出かける時は「帽子を」と手ずから帽子を冠せてくれました。私は晴れた日には、やどかりや小蟹を追いかけてたり雨の日は折紙をしたり錦絵風の江戸名所図絵を見たり、外国土産にもらった三匹の熊の絵本と茶褐色のボール紙で家や車が組立てられる玩具に興じて幼稚園通いより楽しい日々でしたが、夜になって、沖の漁火を眺めると悲しくなり海鳴りをきく夜は父の布団にもぐりこ

みました。そんなある日、兄が幼稚園から言託ったと七夕飾りを屈けてくれ大喜びしましたが、「どの先生？」  
「U先生だよ」との兄の答えて、急に色紙が色褪せて見え翌日屑籠に捨てようとしたら父が「あんなに喜んだのに、まだ綺麗じゃないか」と飾り直したのを覚えています。  
繭の最盛期が過ぎて私だけ家に帰ることになり迎えに来た母に「嬢は良い子だよ」と始めて褒めてくれました。

## 友だち

帰宅してからふとしたことで家の裏通りに住む年上の子たちと友達になりました。この人達の遊びがいきいきとしていて私は魅了ようになりました。冗漫になるので述べる種類だけを記します。お手玉・おはじき・あやとり・うつし絵・日光写真・輪まわし・ゴム縄とび・青竹で作る十二支・地面の陣とり・どんぐり遊びのいろいろ・花相撲・泥饅頭づくり・ことろことろなど。

ゴム毡の破れは自転車で修繕してくれることもこの友だちから教わりました。数名のこの友だちは勝手口か

ら「お嬢ちゃん」とひそやかに呼びに来てくれました。その頃琴を習っていたので爪箱を持って出て琴の稽古には行かず、この人達と遊び呆けました。若しこの人たちとめぐり会わなかったら私はいじけた子に育っていたことでしょう。私はたけくらべのみどりの存在ではなく、むしろ女兒の遊びを何も知らない私に、遊びを教えてやるという興味と満足がこの人たちにあったのだと思います。それと別棟に納屋があり百坪ほどの空地があつて、納屋に入れてある不用になった繭籠で珍妙な劇ごっこを演るのがこの人達の好奇心を満足させ、やまたのおろち・因幡の白兔・一寸法師・三匹の熊・アリババなどをやりました。

琴の稽古を母に内密で怠っているのは後めたく、たまに出かけた時に三回分位覚えればよいと自問自答して、出かけた日は一生懸命に覚えましたが、琴が嫌いではなく遊びたい心を押えて習う順番を正座して待つのがつらく正座が出来ないのでなく母に連れられて藤堂家のお能を拝見に行った時など、熊野の女面のやさしさ、紅葉狩

の鬼女に変わるすさまじさ、その幽玄さに魅せられて長時間正座していられました。待つのがつらいと言うより生き生きした遊びに陶酔していたのでしょう。

仲間の友だちが皆貰っているからとの理由で、兄達には使わせなった小遣を私だけ毎日二銭ずつ貰いました。

そのうれしさ。自由に使える二銭銅貨を握りしめその重みを宝物のように感じました。主におはじき・日光写真・ゴム酸漿・うつし絵などを買いました。

その頃夕方になると背の高い外人がロシアパンとパン売りに来ました。そのテノールの声の響きのよさにパンもきつと美味であるうにと思いましたが母は買わず、やがてその声もきかなくなりました。あれはロシアの捕虜だったと伝えききました。同じ頃十人ほどの子どもが並んで「お父さんには生き別れ、お母さんには死に別れ、頼りに思う院長さんは」と歌うように唱え、そのあと各家をまわって品物を買うよう執拗に頼み母は銘筆など買ってしまいました。なぜ十人が同じ境遇のか不思議でならず、母から孤児院の可哀そうな子供達と教えられても腑

に落ちませんでした。

明治四五年明治天皇崩御、ご大葬に参列する父に母と連れられ、皇居前広場で大勢の人が土下座して祈念している異様な光景、乃木大将夫妻殉死の号外の鈴の音、子ども心にも還りまさぬ御幸に用いられた牛車を拝観させていただき壮重の感に打たれました。

### 小学校低学年のころ

大正二年小学校入学。同年第一次世界大戦で独逸に勝って青島陥落を祝い、店の若い衆は大きな船の模型を造り仮装行列に加り戦勝で湧きました。大正三年大正天皇御即位伊勢神宮にご参拝。姉の婚家が陛下ご柱簾の神宮司庁の隣りである為、御車が徐行し玉顔をよく拝することができました。翌大正四年父は亡くなり、母は四十歳そこそこで髪を切り茶筌髷にしましたが丸髷の時よりこの方が美しいと感じました。長兄は父の跡を継ぐ肌合でなく、よし器であったとしても生糸の輸出は横浜で滞貨し、又父の選挙の痛手で財政的に苦境に落入ったのでし



▲年長組のとき。袖口が絞られた改良袖。

よう本店も新聞社も整理して、郊外の工場傍にある管理人の住所だった処に移りました。陋屋ながら庭もあり庭は土手に続き土手の榎並木は涼風と緑蔭を恵んでくれ、工場の広い生糸乾し場には雑草が生い茂り土の匂いは心を平穩にしてくれました。

傍目には昨日に変わる今日の姿と哀れに映ったかも知れませんが、母と長兄私と弟お手伝さん一人と五人が住むには充分で、生涯で一番精神的に充ち足りた生活が展開しました。母も亦寂しくはあっても、毎朝一番々頭が挨拶

拶に来訪、又新米が入ったから好物の鯉の上物が……と曾ての出入商人が旬のものを持参してくれ、髪結いも近所に来たからと世間話を齎してくれましたから、漁を終えた船が静かに入江で舫いているような平穩さだったでしょう。

三年生になった時、選挙によって級長に任命され、その後毎学期毎学年、二度副級長になっただけでずっと級長に選出されました。母は喜びましたが、この事に依り私の個性は退行して物事に対し、慎重にはなり逡巡忸怩するようになりました。一年生の時友達を工場用の鹽に乗せ漕ぎ出し戻れなくなって二人で泣き出してしまったそんな野性味は消えました。大正七年米騒動が起り津市の米穀取引所は焼打され怖い思いを経験しました。

現在、幼保一元化・長時間保育と子どもの心を不在にして制度だけが先行するのなら私の幼児期を回想して大反対です。若し婦人層にアッピールする政策であるのなら尚のことです。

☆著者には、半生の自伝が収められた『さわらび』の御著書があります。——編集部註